

米作りの図

農家の居間に、「米作りの図」が額に入って飾つてある。何回か見上げるうちに、昔はそういう作業もあつたな、と思うようになった。懐かしい稲作図である。雅拙ではあるけれど、昔ながらの米作りの過程を伝えており、絵一枚の中に八十八の作業をたくみに盛り込んだ。

これが八十八の農作業

描いたのは、松戸から逆井に嫁いだ人で、まだ、農作業が機械化しないころの話―記録でもある。一枚ずつ描いて小学校などに届けたという。農家の機械化は、あつという間に旧来の農作業を崩壊させ、ゼロにした。米作りの図は、郷愁のにじむ一幅の絵になった。

連休に田植え

米という字を分析すれば、八十八たびの手がかかる。お米ひとつぶ粗末にやならぬ、米はわれらの親じやもの。そういう詞が書き込まれている。そして言うのである。「たんぼは土で作る、畑はこやしでつくれ」

この農家では、ゴールデンウィークに二町の田植えを終えた。トラクター、田植え機、コンバイン、乾燥機、精米機などが揃い、米作り工場が完備している。

再び図のこと。

千歯こきを使って脱穀をしている。足踏み脱穀機はあつたはず。これは種子用の籾をていねいにとるためだったという。

土小学校内に「ふるさと資料館」があり、農作業や生活の用具が展示されている。写真は再現されたかまど。



米と云ふ字を分析すれば、
米はわれらの親じやもの

いづみ

